

一八八〇年代前半のフランスにおけるボナパルト派の思想と運動

—— ヴィクトル派の形成と展開 ——

湯 浅 翔 馬

はじめに

一八七九年六月一日、亡命先であるイギリスの軍の一員として南アフリカでのズールー戦争に参加していた皇太子 *le prince-imperial* 「ナポレオン四世」は、キャンプ地を探す任務の最中、ズールー族の襲撃により左肩と右目に重傷を負い、帰らぬ人となった。同月二〇日によくやくパリに伝えられたこの知らせは、ボナパルト派に大きな動揺をもたらした。皇太子は、皇帝ナポレオン三世と皇后ウージェーニーの間に生まれた唯一の子供であり、その存在はボナパルト派にとって最後の希望とも言えるものだった。そして、この死は皇位継承権をめぐる分裂をボナパルト派内にもたらしたのである。

一八七〇年に国民投票によって承認された帝政憲法に則れば、皇位継承権はナポレオン三世のいとこのナポレオン公ジェローム *le prince Napoléon Jérôme* に移ることになる。しかし、ナポレオン公は予てより共和派として知られる人物であり、ボナパルト派内には反感を持つ者も多かった。一方、皇太子は従軍前に書いていた遺言付加文において、「私が死んだ場合、ナポレオン一世、ナポレオン三世の功績を継続する義務はナポレオン公の長男に課せられる」と記し、ナポレオン公の息子であるヴィクトル公 *le prince Victor* を継承者として指名していたのである。²⁾

一八七〇年代のボナパルト派の運動を率いてきた議員団アペル・オ・プープル *Appel au peuple* の指導者ルエルは上院議員などの有力者たちを集め、対応を協議した結

果、ナポレオン公を正統な継承者として認めることになった。³しかし、皇太子の遺言という大義のもと、ナポレオン公に反旗を翻し、ヴィクトル公のもとでの帝政再建を訴える人々が現れ始める。その結果、一八八〇年代のボナパルト派はナポレオン公（父）を支持し、共和政内での改革を支持するジェローム派 *jeromistes*, *revisionnistes* と、その長男であるヴィクトル公を支持し、反共和政と帝政再建を掲げるヴィクトル派 *victoriens*, *imperialistes* に分裂した状態に陥ることになる。八〇年代のボナパルト派の中でも、ジェローム派は左派、ヴィクトル派は右派に位置付けられるが、本稿では特にヴィクトル派に着目し、その思想と運動を検討する。

さて、皇太子が死去した一八七九年は、政治史的には第三共和政の転機となった年でもある。一八七〇年九月に第二帝政が崩壊し、共和政が宣言された後、最初の総選挙である七年二月の下院選以来、政治的実権を握っていたのは王党派だった。七三年には王政復古が寸前まで迫るなど、共和政は非常に不安定だった。しかし、七五年には「第三共和憲法」が成立し、七六年の下院選で共和派は勝利を収めた。さらに、王党派大統領マクマオンが下院を解散させたのちに実施された七七年の下院選でも、共和派は多数派を獲得した。七九年一月には上院でも共和派が多

数派になったことで、マクマオンは大統領職を辞任し、穏健共和派グレイヴィが大統領に就任する。かくして、第三共和政誕生の後、約一〇年の歳月をかけて、下院、上院、大統領の三権力を共和派が掌握したのである。さらには八一年の下院選では、保守派九〇議席に対し、共和派が四五一議席を獲得し、共和政の「定着」、「確立」がはかられていく。⁴

しかしながら、八一年の選挙は共和派にとって完全な勝利と言えるものではなかった。五四一の選挙区中、二五二の選挙区で保守派の立候補者が不在であり、競合者のいない選挙区や、共和派間で争われた選挙区も多かった。共和派の見かけだおしの「大勝」は、潜在する保守派支持や共和派間の対立を内包するものであり、それは八五年の下院選で顕在化することになる。⁵

いずれにせよ、共和派が優位に立っていた政治状況の中で、一八八〇年代は正統王朝派、オルレアン派、ボナパルト派ら王朝を土台とした保守派勢力にとっては衰退の時期に当たる。前述のとおり、皇太子の死はボナパルト派に深刻な動揺をもたらした。他方、八三年にブルボン家の当主シャンポール伯が死去したことで、七三年には実現しなかった正統王朝派とオルレアン派の合同 *fusion* がなされたが、正統王朝派の間にはオルレアン派に対する懐疑が根強

かつた。⁽⁶⁾ フランス右翼研究の泰斗ルネ・レモンは、この時期に関して、共和政の勝利は王朝を土台とした右翼にデモクラシーといかに向き合うかという問題を突きつけたうえに、王朝の断絶と勢力の衰退により、保守派間の融合が進む時代であると位置付けている。⁽⁷⁾ しかしながら、衰退の一途をたどる勢力であるためか、ブーランジスムを契機とするナシヨナリスムという新たな右翼勢力の勃興に対し、一八八〇年代の王朝を土台とした右翼・保守派はこれまで十分に検討されてきたとは言いがたい。⁽⁸⁾ そこで、本稿はヴィクトル派というボナパルト派内の一勢力を通じて、第三共和政期の右翼勢力の一側面に光を当てたい。

では、このヴィクトル派は第三共和政期のボナパルト派研究においてどのように位置付けられているだろうか。日本における第三共和政期のボナパルト派研究がほぼ皆無である一方、フランスやアメリカの研究者の多くは、本来「デモクラシー」と「権威」からなる両義性の特徴とするボナパルティスムが、第三共和政期において、党派の構造的な問題や王党派ら保守派勢力との協力を通じて、左派的な側面を放棄し、「保守化」する過程を描いてきた。⁽⁹⁾ そして、政治勢力としてのボナパルティスムの「保守化」は、ボナパルト派の勢力衰退と関連づけられる傾向にある。そのため、これらの研究において、反共和政を掲げたヴィク

トル派の成立は、党派の分裂を招いた保守的ボナパルティスムの発露の一つとして扱われ、その結果として現れるボナパルト派の勢力衰退の流れの中に位置付けられてきたと言える。

しかしながら、ヴィクトル派の理念や運動の実態に関する本格的な研究はほとんどない。党派の指導者層に視点を定めた研究や、ナポレオン公、ヴィクトル公の伝記的研究がこの問題を取り上げているが、ヴィクトル派自体の問題には深く立ち入っていない。⁽¹⁰⁾

そうしたなか、旧来の保守派勢力と世紀末に台頭するナシヨナリスト勢力の関係を論じたジョリーの研究が、一八八〇年代以降の政治勢力としてのボナパルティスムを検討している。彼はボナパルト派の「保守化」をある種否定的な意味を込めて「悲劇」と呼んできたこれまでの研究を批判して、政治的な文脈を重視する新たな視点を提供した。⁽¹¹⁾ なるほどヴィクトル派を中心としたボナパルティスムの「保守化」自体は確かに起こった現象である。しかし、共和政というデモクラシーが「確立」していく一方、王朝を土台とした右翼が衰退する中で、「保守化」と勢力の衰退が進んでいくことをジョリーは問題としている。ボナパルト派の衰退の最たる要因は、「保守化」それ自体ではなく、共和政の成立によって、デモクラシーと権威からなるボナ

パルティスムの存在理由が、強力な行政権という一点を除き、消滅していくことにある、とジョリーは主張している。⁽¹²⁾

ジョリーの視点は示唆的なものであり本稿も基本的に同じ立場をとるが、彼の研究はイデオロギーに関する側面の記述が乏しく、ヴィクトル派が志向する帝政像が曖昧なままである。また、ボナパルト派は、分析対象の一部であり、かつ対象時期を広く設定しているため、個々の事象の分析は不十分である。そこで、本稿では第一章で、ジュール・アミーグ Jules Amigues (一八二九～一八八三)と、ポール・ド・カサニャック Paul de Cassagnac (一八四二～一九〇六)という二人の人物が、新聞や小冊子などで展開したプロバガンダを通じて、形成期のヴィクトル派の思想・イデオロギーの特徴を分析する。そして、第二章では、出版物の他に、パリの警視庁文書館所蔵の報告書を用いて⁽¹³⁾、ヴィクトル派の運動の実態とその展開を検討する。

ボナパルト派の中でも、ナポレオン公の継承を支持し、共和政内での人民によって選出される大統領制を求めたとされるジェローム派が左派に位置付けられるのに対し、帝政再建を訴え、王党派との強力に積極的だった点において、ヴィクトル派は右派に位置付けられる。ヴィクトル派の運動によって、「保守化」が確かに起こったとして、では、彼らはどのような帝政を求め、どのような運動を展開

し、なぜ「保守化」したのか。そして、それはどのような意味を持ったのか。一八八〇年代前半は、ナショナリズムという新たな右翼勢力の起点となったブーランジスムを迎える前の時期に当たる。思想と運動の実態の両面から、ヴィクトル派を検討することによって、第三共和政初期の右翼勢力の一面を明らかにしたい。

第一章 ヴィクトル派の思想

第一節 ヴィクトル支持が意味するもの

ナポレオン公に対する批判と、ヴィクトル公への支持を熱心に表明することで、ヴィクトル派の形成を思想的に主導したのはポール・ド・カサニャックとジュール・アミーグという二人の人物である。カサニャックは「権威主義者」*autoritaire*と自己規定する⁽¹⁴⁾、ジャーナリストであり、ジュール県選出の代議士でもあった。一方、アミーグは「民主的ボナパルティスト」*bonapartiste démocratique*と自己規定する⁽¹⁵⁾、ジャーナリスト兼政治活動家である。前者は日刊紙『ペイ』*Le Pays*の、後者は日刊紙『プチ・カポラル』*Le Petit caporal*の主幹を務めており、両紙はヴィクトル派のプロバガンダの主要な媒体となった。カサニャックは皇太子の死の報道とともに、ヴィクトル公への

支持を表明し、⁽¹⁶⁾「共和派であると同時に皇帝であると主張しながら、共和国の市民たることを望むことは困難である」とナポレオン公を批判した。⁽¹⁷⁾またアミーグも「ある君主が共和派の体制の支持者である同時に、君主政の原理の代表者であるということはまったくもって滑稽である」と述べる。⁽¹⁸⁾両者の理屈に従えば、帝政再建を目指すためには、共和派として活動してきたナポレオン公は自身の過去と決別し、毅然と帝政の遺産を引き継ぐ意思を表明しなければならなかった。⁽¹⁹⁾

しかしながら、一八七〇年代にこの二人のボナパルティストが訴えていた再建すべき帝政の姿には、かなりの差異がある点に注意しなければならない。カサニヤックの志向する帝政とは一八五二年のそれである。デモクラシーの危険性の一方で、時代の不可逆性を認識していたカサニヤックは、不安定なデモクラシーの時代において、人民によって承認される皇帝という存在によって、秩序を維持する権威的な政体として帝政を認識していた。また、その基盤たる「人民」は農村部の住人であり、都市部の「革命的」人民は「人民」ではないと主張している。⁽²⁰⁾

一方、アミーグの志向する帝政とは一八六〇年以降のものである。彼は第二帝政後半期の自由化と、皇帝のイニシアティブのもとでの労働者の境遇改善を称揚し、帝政再建

を訴えた。また普通選挙と人民投票に基づくデモクラシーの政体という点において、帝政とは共和政の政体であるとしている。すなわち、アミーグは皇帝の主導で社会問題を解決するデモクラシーの政体として帝政を認識していたと言える。そして、その基盤たる「人民」として、都市部の労働者を想定していた。彼は労働者の境遇改善のために帝政再建が必要であると主張する点において「社会主義的」とされるボナパルティストであった。⁽²¹⁾カサニヤックはボナパルト派の右派、アミーグは左派に位置付けられるように、両者の帝政像の隔たりは非常に深く、七三年には、「人民」を巡る問題で論争をも行っている。

この二人がヴィクトル公の名の下に接近し、ヴィクトル派の運動を主導したのは何故だろうか。簡潔に言えば、両者にとって帝政はフランスに再建されるべき「制度」だからである。例えば、アミーグは以下のように帝政再建を訴えている。

「皇帝は死んだ。皇太子は死んだ。しかし、帝政は生き返る。なぜなら、ある人物や血筋が政治的な原理を象徴する場合、その人物の死や、血筋の断絶だけでは、公的な利害や大衆の本能を、その人物や血筋に結びつける自然なきずなを断つには十分ではないから。

ある制度は、その運命にどんな有為転変があつたとしても、歴史的な役割が枯渇したときにしか、世界に、とりわけその制度が生まれた国にもたらすべき全ての使命を果たし終えたときにしか、消えることはない。「…」帝政は、制度として、フランスにおけるその歴史的な役割を終えてはいない。」

アミーグにとつて帝政とはフランスに再建されるべき「制度」である。そして、その再建のためには一人のボナパルトとして、皇帝たりうる人物が必要であつた。⁽²³⁾七〇年代のアミーグの言説における「左翼的」側面とのギャップからか、彼のヴィクトル支持者としての一面を詳しく検討する研究はほとんどない。しかし、皇太子の死以降のアミーグにおいても、その帝政像は七〇年代に彼が掲げていたものと大きな変わりはない。七九年一月、ノール県カンブレールにおける補欠選に立候補したアミーグは「労働者階級の利害の擁護者」を自認して立候補しており、また八〇年には在野期のルイ・ナポレオンの目標は「サン・シモンの」なものであつたと指摘しているように、⁽²⁴⁾彼はあくまで自身が志向する帝政の再建を掲げていたと言える。

一方、デモクラシー時代における秩序を重要視し、強固な反共和政プロバガンダを展開したボナパルト派右派の力

サニヤックに関しては、共和政を容認するナポレオン公への反対姿勢と、ヴィクトル支持の理由はアミーグと比較するとより明解である。さらに、彼はすでに一八七〇年代前半に、「帝政主義」imperialismeなる論理を展開していた。この論理は帝政（＝一八五二年体制）を再建できるのであれば必ずしもボナパルト家によるものでなくとも構わない、という主張である。⁽²⁵⁾帝政主義を最初に打ち出した時点で、カサニヤックは皇太子の死による共和派ナポレオン公の皇位継承を懸念している。⁽²⁷⁾そして、「フランスが存在する限り、普通選挙のフランスが、暴動のフランスが、革命のフランスがある限り、帝政主義は唯一可能な政府の形態として、いっそう強化されることを運命付けられている」と述べるように、帝政が不安定なデモクラシーの時代において未だに必要とされていることをカサニヤックは強調している。このようにアミーグにおいても、カサニヤックにおいても帝政はある種の「制度」としてフランスに再建されるべき政体である。それゆえ（現行の）共和政は否定されるべきものであり、共和派ナポレオン公の継承は受け入れられるものではなかつたのである。そして、ヴィクトル派は、継承権の正統性における「帝政主義」的立場ゆえに、帝政派imperialistesと呼ばれるようになる。

そして、七九年一月のノール県での補選への出馬を

同県やパリでのボナパルト派の指導者層から反対されたアミーグをカサニヤックが擁護して以降、²⁹両者は接近し、ヴィクトル派の運動が本格的に始まっていく。ボナパルト派右派のポール・ド・カサニヤックだけでなく、左派に位置付けられるジュール・アミーグによるプロバガンダをも基点に、ヴィクトル派の運動が発出したことに鑑みれば、ヴィクトル公を支持することは、単にナポレオン公に反感を抱くボナパルト派右派勢力の結集ではなく、思想の左右を問わず、一八七九年以降もあくまで帝政再建を求める人々たちにとっての選択肢の一つとしても、機能していたのではないだろうか。しかしながら、両者の志向する帝政の差異は解消されぬままであり、第二章で検討するよう

に、ヴィクトル派内での対立の火種を残したのであった。

第二節 ヴィクトル派の「保守的」特徴

ヴィクトル派という集団の形成は、帝政再建を求める姿勢からの、共和政を容認するナポレオン公の継承への反対から生じたものである。そのためナポレオン公に対する批判がプロバガンダ活動の中核を占めると同時に、ナポレオン公が認めた共和政とその政策に対しても、批判が展開されたことが特徴的である。まさにこの意味において、ヴィクトル派は反共和政右翼勢力である。

カサニヤックは、第二帝政末期から猛烈な反共和派プロバガンダを繰り広げた保守派として知られた人物であり、彼の反共和政の姿勢は、八〇年代前半も顕著である。アミーグも自身が所有する媒体において共和政の政策や現状を熱心に批判し続けた。彼は民衆が悲惨な状況に陥っている最大の原因は「政治制度の不安定性」にあるとして、オポチュルニストを批判し、³⁰そのもとの社会問題の解決は不可能であると主張した。³¹アミーグも、帝政再建を前提とした反共和政論者という点では「保守派」であるが、それは同時に彼が重視する労働者問題・社会問題からの観点からなされてもいたという点で、ヴィクトル派内の多様性を体現する存在だったと言える。

さて、こうした共和派政府に対する批判の中でも、最も注目すべきは、反修道院政策への批判である。七九年から八〇年にかけて共和派政府はイエズス会を中心とした無認可の修道会を解散させる政策を打ち出した。³²これに対してナポレオン公が「迫害ではなく、公法に不可欠な規定である」と擁護したことも重なり、ナポレオン公の姿勢への批判とともに、ヴィクトル派のメディアは共和派の反修道院政策を熱心に取り上げている。第二帝政期からキリスト教を社会秩序の中軸に据えていたカサニヤックは、³⁴当然のごとく、信仰の自由を破壊する共和政とキリスト教は共存で

きないと断言している。⁽³⁵⁾これはヴィクトル派の中でも左派

に位置するアミーグについても同様である。アミーグも反修道院政策を信仰の自由への侵害として位置付け、共和政の「自由・平等・友愛」の一角をなす「自由」とは、一部のセクトによる、他者への醜悪な不寛容でしかないと批判を展開した。⁽³⁶⁾七〇年代から王党派との保守派間での同盟政策を熱心に提唱していたカサニヤックだけでなく、この問題に関しては、アミーグも正統王朝派との共闘に積極的な姿勢を示すなど、⁽³⁷⁾共和派政府の攻撃からカトリックを擁護するという立場に関しては、ヴィクトル派は「保守的」集団であったと言える。

帝政観そのものに差異があるとはいえ、アミーグとカサニヤックが共にヴィクトル公を支持したという事実は、それがボナパルティストの選択肢の一つとして機能していたことを示している。

また、共和派政府の反カトリック政策に対し、教会を擁護する立場をとったことからわかるように、ヴィクトル派の運動はその初期から、反共和政的なイデオロギーの面では「保守的」な様相も帯びていたことも確かであった。帝政支持の理由は異なっているが、次章で検討するように、こうした保守性は、共和政が確立していく中で展開されていくヴィクトル派の運動において、より明白なものとなっ

ていくのである。

第二章 運動の展開…一八八〇～一八八五

ヴィクトル派の運動の実態の検討に入る前にまず、それが抱えていた制約について説明をしておかなければならない。第一に、心情的にはヴィクトル公を支持するものの、人民投票で承認された憲法に基づくナポレオン公の皇位継承権を認める者が議員レベルでは多く、大々的にヴィクトル支持を表明する議員は少なかった。⁽³⁸⁾第二に、七九年時点でまだ一七歳であったヴィクトル公は父ナポレオン公の影響下にあり、勉学のために長く国外に居住していた。すなわち、ヴィクトル派の運動は、ヴィクトル公自身の同意・意志を棚上げにしたまま始まったのである。ヴィクトル公による運動への公的な承認はなかく得られず、また運動自体を否認される危険すらはらんでいた。それゆえ、ヴィクトル派の具体的な活動は選挙・議会レベルよりも、出版によるプロパガンダや運動の組織化に重きを置いたものとなった。帝政再建のためにはまず皇帝となる人物が必要である。したがって、ヴィクトル派にとっては、ヴィクトル公に支持を集めることで公的な継承者であるナポレオン公に譲位を迫ることが優先事項になったのである。

第一節 運動の始まり…一八八〇〜一八八一年

一八八〇年一月、サン・トーギュスタン教会およびサン・フィリップ・ド・ルール教会でのナポレオン三世の命日の祈念するミサの後、ヴィクトル派による示威行動が起こされ、騒動へと発展した。⁽³⁹⁾ 後者のミサの際、ジュール・アミーグの不在の理由を聞かれた息子のジョルジュ・アミーグは多数の民衆を引き連れ、自宅のあるシテ・ベルジェールへ向かった。ジュール・アミーグは、この出来事により、ヴィクトル公支持の世論が確実に存在するのだと主張した。⁽⁴⁰⁾ そして、カサニヤックは以下のように宣言する。

「真実とは、サン・フィリップやサン・トーギュスタンには、たくましい腕と勇敢な心を持った四千人あるいは五千人もの偉丈夫たちがいたということである。[：:]」

これ以上、ボナパルト派の指導者たちは、私たちに理解できない慎重な態度を取ることは許されない。「[：:]」彼ら民衆のざわめきを聞け。「[：:]」次第に大きくなる、党指導者たちの無気力とためらいを糾弾するこのざわめきを！そして「前へ！」との叫びを！⁽⁴¹⁾

このように、まだ組織を持たない時点でのヴィクトル派

の運動は皇帝や皇太子の誕生日や命日を記念するミサを通じて行われた。一月のナポレオン三世の命日のほか、六月の皇太子の命日や八月のナポレオン一世の誕生日を祈念するために開催されたミサはヴィクトル支持の世論の存在を喚起するための示威行動の場となつてゆく。⁽⁴²⁾ こうした文脈の中で、アミーグは自身の挿絵入り週刊誌『ドロワ・ドゥ・プーブル』*Le Droit du peuple*に、肩を並べてミサから帰るアミーグとカサニヤックが群衆に歓呼される画像や、ヴィクトル公の肖像画を掲載し、ヴィクトル公とヴィクトル支持者の存在をアピールしている。⁽⁴³⁾

そして、同年一〇月、シルク・フェルナンドにおいてヴィクトル派の公開集會が開催された。この集會は約三千人を集めたうえに、ナポレオン公に讓位を求める委員の任命が行われるなど、大々的にヴィクトル公の継承権が訴えられた。⁽⁴⁴⁾ カサニヤックはこの集會の成功は「帝政派の目覚め」を意味するのであり、人民投票の原理のもと「人民に君主は従わなければならない」と、ナポレオン公の讓位を主張した。⁽⁴⁵⁾ ミサを利用した形式からシルク・フェルナンドでの公開集會へと運動が発展した背景にはヴィクトル派の組織化の動きがある。一八八〇年九月時点で運動の方針を協議する*Comité des Ricollées*の存在が確認されている。⁽⁴⁶⁾

しかしながら、シルク・フェルナンドでの公開集会以降、運動に大きな展開はなく、慎重な姿勢が目立つようになる。八〇年一月や八一年三月には大規模な公開集會を開催する話も出るが、立ち消えになっている。こうした経過の背景には大規模な集會を望むアミーグと、ジェローム派からの激しい批判のなかで、まずは組織化を優先しようとするカサニヤックとの方針の違いが確認される。さらには経営不振に陥っていたアミーグの日刊紙『プチ・カポラル』も買収され、運動は大きな停滞を余儀なくされる。⁽⁴⁶⁾

皇太子の死と、それによる党派の分裂という混乱の中、八一年八月末〜九月初めに行われた下院選において、ボナパルト派は大きく勢力を後退させた。立候補者自体も減少し、議席数も約四〇議席と七七年の選挙から半減した。⁽⁴⁹⁾ 同頃にはパリの各区にヴェイクトル派のコミテを組織しようとする動きが見られるものの失敗に終わり、アミーグとカサニヤック両者ともに慎重な姿勢が顕著になっている。⁽⁵⁰⁾ このように、八〇年一〇月の公開集會以降、ヴェイクトル派の運動は、一年以上の停滞期を迎えたのである。

第二節 運動の高揚…一八八二年

ところが、ヴェイクトル派の運動は八二年初めから徐々に進展が見られるようになる。この時期はある種の運動の高

揚期と言える。共和政の象徴であるガンベッタ内閣の失墜がボナパルト派に活気を与える一方、『プチ・カポラル』へのアミーグの復帰がささやかれるようになった。⁽⁵²⁾ そして同年三月には、アミーグ派のアンリ・ディシャールHenri Duchar(一八四五〜?)⁽⁵³⁾が、同紙の主幹になり、これ以降、運動は活発化していく。ディシャールの経歴は判然としないが、元陸軍軍人であり、七〇年代半ばにパリのボナパルト派のジャーナリズムに加わったと考えられる。⁽⁵⁵⁾

同時期、ヴェイクトル派日刊紙とジェローム派日刊紙の間で、父ナポレオン公と息子ヴェイクトル公の政治信条を巡って論争が展開された。ヴェイクトル派は、ヴェイクトル公はナポレオン公とは異なり、共和国を嫌悪し、神を擁護していると主張し、ジェローム派に論戦を挑んだ。⁽⁵⁶⁾ この論争に対し、ヴェイクトル公は、書簡をジェローム派の日刊紙に掲載することで、論戦の沈静化を図った。その書簡で、ヴェイクトル公は父への敬意と論争への疑義を述べたうえで、「私の関心は、私が冠する名に値する人間になること、義務を果たすように呼びかけられた時に祖国に奉仕する準備をすることです」と述べている。⁽⁵⁷⁾ これを受けて、カサニヤックはその真意を尋ねるために、ハイデルベルクに居住するヴェイクトル公を訪問した。そこで彼は、ヴェイクトル公から、共和政に共感を示す父と政治信条を共有していないこと、志

願兵役を終えれば政治運動に参加する意思があることを伝えられた。⁽⁵⁸⁾

ヴィクトル派の運動におけるひとつの到達点と言える一八八二年八月一日のサール・ド・ヴァグラムにおける公開集會が開催されたのはこうした文脈においてであつた。この集會の準備のために多くの私的會合が行われ、特別委員會の結成、呼びかけの手段、集會が成功した後のパリの各区でのコミテの設置といった事柄が盛んに協議されている。⁽⁵⁹⁾ そうした過程からは、ヴィクトル派が自身の存在を強くアピールすることを意図していたことがわかる。実際に約一万五千枚もの案内状が配られ、⁽⁶⁰⁾ その結果、約五千人が集まつた大規模な集會となつた。そして、これまでヴィクトル派を指導する役割を担つてきたアミーグとカサニャツクの両名が登壇し、大勢の聴衆に向けて講演を行なつたのである。『プチ・カポラル』の翌日の号には両者の講演が付録として付け加えられた。デイシャールは、「この日、私たちの年代記において眩いばかりの光が刻印された。この日は帝政派支持の世論の目覚めの日であり、皇太子の死以来最初の大規模な示威行動の日である」と述べている。⁽⁶¹⁾ さらに翌々日には、「帝政が打ち建てられた。これが全体的な印象であつた。今や、帝政派は共通の希望と共通の行動のもとに団結しているのだ」と熱を込めて集會の成功を

書き記している。⁽⁶²⁾

かくしてその存在を世にアピールしたヴィクトル派は運動の本格的な組織化へと向かつた。⁽⁶³⁾ サール・ド・ヴァグラムの集會の約二ヶ月後にはパリの四区、五区、六区、七区、八区、一〇区、一一区、一二区、一三区、一五区、一六区、一七区、一八区、ヴァンセンヌ、ヴェルサイユ、クールブヴォワ、ロマンヴィルにヴィクトル派のコミテの存在が確認されている。⁽⁶⁴⁾ 警視庁文書からはデイシャールがこの組織化に熱心に関わつていたことがわかる。彼は少なくとも一区、二区、五区、九区、一三区、一六区でのコミテ結成を議題とした私的集會に出席し、その必要性を熱心に説いて回つていた。⁽⁶⁵⁾ これらのコミテは、委員長 president、副委員長 vice-president、書記 secrétaire を選出し、それぞれに規約を備えていたと考えられる。なお警視庁文書からは、六区についてのみ、形成期の規約に関する集會の様子を確認することができるが、他の地区でも大きくは変わらないと思われる。その規約は「一条からなり、構成員は六区に居住していること、定期的に會費を支払うこと、何があろうとも帝政派とアベル・オ・プールの政策を擁護すること、それらの指導者に従ふことなどが定められている。⁽⁶⁶⁾ 翌年五月初め、パリでジュール・アミーグの葬儀が行われた際には（アミーグの死については後述）、

三区、二〇区を除く一〜一九区のコミテが参加している。⁽⁶⁷⁾
こうしたことを考慮すれば、パリおよびの周辺のコミテの
結成による運動の組織化はある程度進んでいたと言えるだ
ろう。

第三節 分裂へ…一八八三年〜一八八五年

八二年秋以降の組織化の一方で、カサニヤックは再度ド
イツへと向かうが、ヴィクトル公に面会を断られた。⁽⁶⁸⁾ ヴイ
クトル公が志願兵役についた同年一月には大規模な公開
集会在計画されたが、ヴィクトル公にはまだその準備がな
いとカサニヤックはその提案を退けている。⁽⁶⁹⁾ ヴィクトル公
自身からの積極的な支持が得られないながらも、徐々に活
性化しつつあったヴィクトル派の運動に対して、八三年初
め、ナポレオン公から打撃が加えられることになる。

八三年一月一六日、ナポレオン公は、ボナパルト派の運
動の主導権の掌握を目指して、現行の共和政を批判するポ
スターをフランス各地に掲げさせた。その枚数は数万枚に
及び、ナポレオン公が警察によって逮捕される事態に発展
する。⁽⁷⁰⁾ ナポレオン公は、そのポスターで以下のように宣言
する。

「フランスは苦しんでいる。

一八八〇年代前半のフランスにおけるボナパルト派の思想と運動

国民の大多数はうんざりしているのだ。「…」
行政府は弱体化し、何もできない。無力である。
議会は行き先もわからず、意欲もない。「…」
権力にある党派はその低劣な情熱を満足させること
しか追い求めているために、彼ら自身の原理を蔑ろ
にしているのだ。

「…」ナポレオン一世とナポレオン三世の継承者で
ある私は、七三〇万票を集めた者の名を冠する唯一の
生存者である。「…」人々は讓位について話してい
るが、そうはならないだろう。權利よりも多くの義務を
有している時、讓位とは脱走である。「…」ブルボン
家の唯一の象徴となった白色旗を支持する人たちは
いかなる共闘も不可能である。「…」

二人のナポレオンは直接的人民主権 *la souveraineté
directe du peuple* を擁護してきた。この教義は人民投
票をただただ恐れる共和派たちによって見捨てられて
きた。「…」私は一つの党派ではなく、一つの立場と
一つの原理を代表するのだ。「…」その原理とは人民
が指導者を任命する權利である。この權利を否定する
ことは、国民主権 *la souveraineté nationale* に対する侵
害である。⁽⁷¹⁾

この文書の中でナポレオン公は讓位を否定する一方で、帝政再建には直接言及しなかった。また、王党派との同盟を否定している。しかし、現行の共和政を痛烈に批判し、人民主権の擁護者であるナポレオン一世及び三世の唯一の後継者として、人民投票による直接民主政の導入を求めたのである。ナポレオン公の宣言文は、ボナパルティストの多くに好意的に受けとめられた。カサニャックは宣言文の価値を一切認めず、擁護したボナパルト派議員の態度を批判した一方、アミーグはあくまでヴィクトル支持という自身の心情は変わることはないとしつつも、ナポレオン公の逮捕は暴力的な行爲であると非難した。⁽⁷³⁾

カサニャックとアミーグの態度に差異が見られたことから明らかのように、この宣言はヴィクトル派に大きな動揺をもたらした。逮捕の翌日には、議長デイシヤールのもと、ヴィクトル派全体として取るべき対応を協議するため、急遽各コミテの委員長を集めた私的集會が開かれ、アミーグとカサニャックの両名に意見を聴取するための委員會が任命されている。⁽⁷⁴⁾そして、一月二〇日、この事件に対するヴィクトル派としての宣言文が準備された。ナポレオン公が讓位を否定していたこともあり、彼を批判するべきだという声も上がるが拒否され、おおよそアミーグが支持した路線で宣言文が採決される。まず、人民投票、それは

救済であり権利であるという皇太子の遺言を尊重すること。皇太子の遺言の通り、ヴィクトル公に帝政派の未来はかかっているが、ナポレオン公に対する共和派政府の暴力には断固反対すること。ナポレオン公は今回の宣言文により、ナポレオン三世と皇太子が象徴する帝政の伝統に回帰したが、将来行われる人民投票には従うべきであること。ヴィクトル派はこれまで以上に人民投票の原理を支持しなければならぬことなどが記されている。⁽⁷⁵⁾

第一章第一節で確認したように、皇帝たるべき人物をヴィクトル派は求めていた。ナポレオン公の宣言文は、この点に関して、ヴィクトル派内に揺らぎをもたらした。ある集會では「ナポレオン公はルイ・ナポレオンのように大統領になつてから帝政を再建するつもりなのではないか」などの意見も主張されるようになり、騒動が収まるまでヴィクトル派集會も減少傾向になつていった。⁽⁷⁶⁾

こうした中、八三年四月末、アミーグが肺炎のため死去した。七〇年代より労働者の利害の立場から帝政再建を主張してきたアミーグの死は、日刊紙『プチ・カポラル』の下に集まつた、ヴィクトル派内の左派勢力にとつて大きな意味を持った。五月二日の葬儀ではデイシヤール、カサニャック、ドレオールが追悼の演説を行ったが、その翌日、カサニャックは自身の指揮下でのコミテの再編を促

し、デイシャールをはじめとするアミエグ支持者たちの間に、カサニヤックに対する不満が生じていく。ヴィクトル派の一枚看板となったカサニヤックはオルレアン家のオマール公と会談する一方、前年に成功を取めたサール・ド・ヴァグラムでの集会の再現を目指した八月一五日の集会への参加を断り、運動に慎重な姿勢を求めるなど新たな方向性を模索している。⁽⁸³⁾

他方、ヴィクトル派とヴィクトル公自身との間の齟齬も現れ始める。八三年末、カサニヤックがヴィクトル公からの署名入りの通達の存在を示唆したことにより、ボナパルト派内は紛糾した。⁽⁸⁴⁾ ヴィクトル公はその通達の存在を否定したが、カサニヤックは引き下がらなかった。騒動は八四年に入ってからも続いたため、ヴィクトル公は一通の手紙を公開し、その沈静化をはかった。その中でヴィクトル公は、父ナポレオン公への批判をやめるように求め、自身も父に背くことないと主張したのである。こうしたヴィクトル公の慎重な態度は、ある種の落胆をヴィクトル派にもたらした。⁽⁸⁵⁾ カサニヤックがソリユエ・シヨニスム solutionisme なる論理を掲げ、王政復古への期待を示したのはこうした文脈においてであった。カサニヤックは王政復古と帝政再建について以下のように宣言する。

「帝政派はもはや王政復古の可能性を不幸なこととは考えていない。

現在の恥辱と悲惨のすぐそばでは、誠実な帝政派の目には王政は天の祝福のように見えるのである。

また、私たちが希求しているキリスト教的で保守的な帝政は、王党派に反乱を起こさせるようなものではないと、私たちは確信している。

共通の敵という存在を前にして、かつての対抗関係の痕跡は消え去ったのだ。[…]

王政も帝政も、同じ方法で統治することを余儀なされるだろう。もし再来するならば、上に権威を、下にデモクラシーを配するのだ。[…]

ナポレオンの名も、オルレアンの名も、もはや同じような酒瓶に、同じ謳い文句が貼られたラベルの差異に過ぎない。[…]

もちろん、各々はそれぞれの趣向、希望を保持する。しかし、勇敢さにおいて、絶望的なほどの明白さにおいて、共和政の忌鐘のように鳴り響く以下の表現にすべては到達するのだ。

誰でも構わない！ N'importe qui!
誰でも構わない！ N'importe quoi!⁽⁸⁶⁾

共和政を打倒するならばオルレアン家でもボナパルト家でも構わないと主張することは、七〇年代に彼が主張していた、帝政再建をするならばその人物の血筋は問わないという「帝政主義」から、さらに踏み込んだ主張である。王党派とのボナパルト派の保守派同盟政策による共和政打倒は、七〇年代からのカサニヤックの主張と共通している⁽⁹⁰⁾。しかし、七三年の王政復古の危機の際には、カサニヤックは明確に王政復古に反対しており、同盟政策はあくまで共和派に対抗するために取るべき手段であった。しかし、ソリュエーションニスムは、あくまで帝政再建を追求するというヴィクトル派の「ボナパルティスト」としてのアイデンティティから離れ、「保守派」としての一步を踏み込むものであった。王政復古をも支持しうる態度を表明することは、皇太子の遺言であるヴィクトル公の継承権を死守しない可能性を内包しているからである。もはや既成事実化しつつある共和政への対抗と、縮小していくボナパルト派勢力、そしてヴィクトル公の煮え切らない態度を前にして、カサニヤックが保守派としての立場へさらなる一步を進めるなかで、ヴィクトル派は分裂に向かうことになる。

こうした中、八四年五月、ヴィクトル公は親元を離れた。この独立は、帝政派の資金援助のもと、ナポレオン公に告げることなくヴィクトル公が行ったものであり、ナポ

レオン公を激昂させた⁽⁹¹⁾。この出来事は、長く続いてきた皇位継承権をめぐる親子関係に深い亀裂をもたらした。事件をできるだけ荒立てたくないジェローム派と、ヴィクトル公の自立志向を宣伝したいヴィクトル派の間で論争が起こった⁽⁹²⁾。親子間の手紙などが公開され、父と息子の関係に亀裂が広がり、ボナパルト派内の分裂は一層深刻なものとなっていく⁽⁹⁴⁾。

そして、同時期、ヴィクトル派内でのカサニヤックの主導権が確立されていく。八四年五月、ながく経営不振に陥っていた『プチ・カポラル』が破産し、カサニヤック派の手に渡った⁽⁹⁵⁾。これにより、アミーグ以来のヴィクトル派内の左派勢力はプロバガンダの機関を失い、決定的な打撃を与られた。一方、カサニヤックは王党派との同盟を積極的に提唱し、反共和政戦線を訴えていく。八四年四月の市議会選挙に関して、「パリの保守的、キリスト教的帝政派は、なんとしても、次の市議会選挙に無関心ではない⁽⁹⁶⁾」、と述べるように、保守勢力と教会勢力との共闘に主眼を置くようになっていく。さらには八五年の下院選に対して、カサニヤックは反共和政と教会擁護という共通利害のもと、王党派との妥協を訴える。

「帝政や王政の復活を頑なに求める者たちと断固戦

わなければならない。[…]

れつきとした継承者が存在し、王朝の対立が明白である限り、絶対的で実現不可能な協力関係を夢見てはならない。相対的で実現可能な協力関係を目指すべきである。

共同戦線を実現させる、しかるべき理由がある。共和政への憎悪、宗教の利害の擁護である。⁽⁹⁷⁾

こうしたカサニヤックの帝政再建を棚上げにし、王党派との妥協を図る路線に対して、デイシャルらのアミーグ支持者の不満は蓄積されていった。たしかに、かつてアミーグも共和派の反修道会政策に対しては、正統王朝派との共闘を擁護していた。しかし、その共闘は王政復古とは何の関わりもなく、カサニヤックが掲げるような妥協からは程遠いものであった。

八四年六月末、セーヌ県の各コミテの代表者を集めたヴィクトル派の集会で、カサニヤックが当該地区のコミテ *comité central* の長に再任され、ヴィクトル派の「保守派」路線が明白になった一方、その集会で、デイシャルは以下のような議題を準備していた。

「すべてのコミテ・アンペリアリスト・ド・ラペ

ル・オ・プーブルは、ヴィクトル公こそが指導者かつ皇帝であり、帝政的かつ民主的な観念を体现していることを確認すると宣言する。共和政とオルレアニスムの土台となる保守派同盟を求めるような者たちに対しては、いかなる譲歩もしないことを宣言する。⁽⁹⁸⁾

この議題はヴィクトル公自身のものなのかとヴィクトル派の一人に尋ねられたデイシャルは、「いいえ、しかし、アミーグと私は、ヴィクトル公自身のようなもののだ」と答えている。故アミーグに象徴されるボナパルト左派のヴィクトル派内での影響力の低下は明らかだった。そして、もはや自身の考えを表明するメディアを持たないデイシャルは、ヴィクトル派の運動から離脱、ジェローム派へと接近し、カサニヤックへの批判を展開していった。

カサニヤックやマコー *baron de Mackau* らによる保守派同盟 *Union Conservatrice* が選挙戦において一定の成果をあげる八五年と、その翌年、デイシャルはヴィクトル公に宛てた書簡の形式をとった二冊の小冊子を出版した。その中で、アミーグの死以降の運動の「保守化」と、カサニヤックによる運動の主導について、以下のように批判している。

「公よ、あなたの傍には、当初、先導者として、豊富な才能と学識深い政治能力を持った人物がいました。〔…〕私はジュール・アミーグのことを、我が師として、未だに代わる者のなき我が師として、仰いでいる人のことを申し上げたいのです。彼が生きていれば、きつと、物事は違った展開を見せていたでしょう。しかし、アミーグが死んだために、ヴィクトル主義Victorismeはその主たる擁護者を奪われたのです。公よ、あなたは見識ある指導者を、耳を傾けてくれる助言者を失ったのです。アミーグはもういません。そのためヴィクトル主義もまたその可能性を失ったのです。なぜなら、保守派同盟理論という有害な傾向が、決定的な勝利を収めてしまうことを防ぐものは何もないからです。』⁽¹⁰⁾

「ある有力な人物がコミテ全体を支配してしまいました。〔…〕私はド・カサニヤックのことを申し上げますているのです。〔…〕

彼は毎週水曜日、『マタン』*Le Matin*において、暴力的ではあるものの読む者を惹きつける記事によって、有害なソリューションスムの理論を発展させ、共和国フランスを転覆する君主なら誰でも構わないと宣

言しました。この主張は多くの者を取り込み、王党派を擁護し、いわば怠惰な王の住まう宮殿における、宮宰のような役割を果たしてしまいました。』⁽¹⁰⁾

おわりに

共和派として知られるナポレオン公の皇位継承に反対したジュール・アミーグとポール・ド・カサニヤックを中心として、ヴィクトル派の運動は始まった。両者が考える「再建すべき帝政」の姿は相当異なっていたように、政治思想にはかなりの差異が見られる。しかし、両者にとつて帝政はフランスに「制度」として再建されるべきものであった。この二人の人物を通してヴィクトル派の形成を考えるならば、それは単なるボナパルト派内の右派勢力の結集ではなく、思想の左右を問わず、帝政再建を願う者たちが取りうる選択肢の一つでもあったと言える。少なくとも、派閥形成の初期段階では、各々の志向する帝政像において、ヴィクトル派はある程度の多様性を有した集団であったのである。

かくして始まったヴィクトル派の運動は、当初、ミサを通じた示威行動・出版によるプロバガンダを中心としたものであった。八〇年一〇月のシルク・フェルナンドの公

開集会でナポレオン公に讓位を求めるなど、一時は盛り上がりを見せたが、八二年までは組織化も遅れ、運動としては停滞していたと言える。

そして、八二年以降、ヴィクトル派の運動は發展を見せる。念入りに準備された八二年八月一日のサール・ド・ヴァグラムでの公開集会は約五千人という参加者を集め、それまでヴィクトル派の旗振り役であったカサニヤックとアミーグが演説を行った。この集会はヴィクトル派の運動の最盛期であると同時に、組織化による運動拡大の起点でもあった。八二年の秋から冬にかけて、パリとその近郊でコミテが設立されていったことは、組織化の面での運動の進展を物語っている。

しかし、こうした組織化の一方で運動は分裂へと向かった。八三年一月、ナポレオン公の宣言文がヴィクトル派に動揺をもたらす中で、四月末にアミーグが死去した。これ以降、カサニヤックを中心とするヴィクトル派の「右傾化」が進んでいく。カサニヤックは「ソリユーションスム」という論理により、王政復古への期待を表明し、帝政再建というヴィクトル派の当初の思想から離れ、八五年の下院選を見据えた保守派同盟を求める主張を盛んに展開した。その中で、右翼勢力の代表である王党派との融合という意味での「保守派化」がヴィクトル派の中で進んでいっ

た。こうした方針に反発したアミーグ派のデイシャールが、ヴィクトル派の運動から離反を余儀なくされたことは、ヴィクトル派の「右傾化」と「保守派化」の進展を示すものである。

以上のヴィクトル派の思想と運動の実態の分析から、皇太子の死を経てまなお、帝政再建を目指す人々の選択肢の一つとして形成されたヴィクトル派が、八〇年代半ばには、王党派に代表される反共和政保守派勢力の一部となっていく「保守化」の過程が明らかにされた。

最後に、今後の展望を含めて、「保守化」へと向かったヴィクトル派の運動は当時の政治的文脈の中でいかに位置付けられるかを考えたい。それは政治勢力としてのボナパルティスムに残された数少ない選択肢の一つでもあったと考えられる。「議會共和政」が確立していく一方で、王朝を土台とする右翼が低迷する政治状況の中で、保守派同盟という選択肢が右翼的な反共和派に残された。事実、カサニヤックらが提唱した保守派同盟は、一八八五年の下院総選挙で一定の成果を得ている。第一回投票では保守派勢力の一七六議席に対し、共和派勢力は一二七議席であった。第二回投票では選挙協力により共和派が三八三議席を確保したが、保守派の獲得票数は全体の四二%、二〇一議席(ボナパルト派は六五議席)に達した。¹⁰³

成立から十年以上が経ち、不安定な議會を抱えながらも共和政が定着していく中で、政治勢力としてのボナパルトイスムにとつて、現実と向かい合った際に取りうる選択肢は、もはや、いかにして帝政を再建するか、ではなく、いかにして共和政・共和派に対抗するか、というものだったと言える。以上のように状況を整理すれば、王党派との融合へと向かうという意味でのボナパルトイスムの「保守化」からは、厳しい状況に置かれた一右翼勢力が、いかにして共和政というデモクラシーと向かい合ったかという、これまでほとんど検討されてこなかった第三共和政初期の政治史の一側面が見て取れるのではないだろうか。

そして、一八八〇年代後半には、ブーランジェの陸軍大臣就任に象徴される急進派の拡大への対抗から、ボナパルト派（特にヴィクトル派）や王党派ら保守派勢力に、穏健共和政との「妥協」という方向性、すなわちどのような共和政なら認められるかという問題が生じる。⁽¹⁰⁾そして、この妥協路線が潰えた後に、ブーランジスムへと接近していった。⁽¹¹⁾事実、ボナパルト派のほとんどは、それぞれの思惑の差異は有れども、ブーランジスムの熱狂に取り込まれていったのである。

こうした八〇年代後半のボナパルト派とブーランジスムを取り巻く問題は、今後の検討課題である。また、ジェ

ローム派の問題についても同様である。彼らは共和政を認めつつも、オポルチュニスト体制を批判し、直接選挙を通じた大統領を求める「ボナパルト派」として、プロパガンダを展開した。その中で、ジェローム派の中心人物であるラングレ Lengle が、ブーランジスムに深く関わることで、デルレードなどのナシヨナリスト勢力に接近していく現象も見られる。⁽¹⁰⁾ジェローム派の位置付けを明確にしたうえで、ブーランジスムとボナパルト派の問題に取り組むことで、繰り返される政体の転換に特徴付けられるフランス近代政治史の中で、共和政の定着がもたらされた第三共和政におけるボナパルト派の問題を、より広い視点から検討できるだろう。

註

- (1) Jean-Claude Lachnitt, *Le prince impérial* « Napoléon IV », Paris, Perrin, 1997, pp.278-296.
- (2) Cité par *Le Pays*, 2 juillet 1879.
- (3) *L'Ordre*, 21 juin, 3 et 21 juillet 1879; Frédéric Chalaron, « Rouher et la succession du prince impérial », in Louis Girard (dir.), *Eugène Rouher. Actes des journées d'études de Riom et Clermont-Ferrand des 16 et 17 mars 1987*, Clermont Ferrand, Publications de l'Institut d'études du

- Massif central, 1984, pp.89-95; Robert Schnerb, *Rouher et le Second Empire*, Paris, Armand Colin, 1949, pp.317-318.
- (4) Jean-Marie Mayeur, *La vie politique sous la Troisième République*, Paris, Seuil, 1984, pp.12-113.
- (5) Odile Rudelle, *La république absolue. Aux origines de l'instabilité de la France républicaine 1870-1889*, Paris, Publication de la Sorbonne, 1982, pp.81-84.
- (6) Stéphane Rials, *Le légitimisme*, Paris, Presses Universitaires de France, 1983, pp.113-119.
- (7) René Rémond, *Les droites en France*, Paris, Aubier, 1982, pp.146-147.
- (8) 例えはレモンの研究において、一八七一年から一八七九年の道徳秩序Ordre Moralの時期を扱う第六章の後、第七章で主に扱うのは、一八九九年から一九〇二年である。Ibid.
- (9) John Rothney, *Bonapartism after Sedan*, New York, Cornell University Press, 1969, pp.268-280; Bernard Menager, *Les Napoléon du peuple*, Paris, Aubier, 1988; Patrick André, *Les parlementaires bonapartistes de la Troisième République (1871-1940)*, these de doctorat (Université Paris IV), 1995.
- (10) F. Chalaron, *op.cit.*; François Pairault, *Monsieur le baron Eugène Eschassériaux, éminence grise du bonapartisme* 一八八〇年代前半のフランスにおけるボナパルト派の思想と運動
- 1823-1906, Paris, Le Croit Vit, 2004, pp.231-249; Michèle Batestti, *Pion-Pion. Le Bonaparte rouge*, Paris, Perrin, 2010; Laetitia de Witte, *Le prince Victor Napoléon*, Paris, Fayard, 2007, pp.118-184.
- (11) 第三共和政期のボナパルティズム研究の多くは、ボナパルト派右派が、第三共和政期のボナパルティズムを支配したと指摘し、それを「悲劇」としたルネ・レモンの研究に影響を受けている。R. Rémond, *op.cit.*, p.121.
- (12) Bertrand Joly, *Nationalistes et conservateurs en France 1885-1902*, Paris, Les Indes Savantes, 2008, pp.217-222. なお、ジョリーの研究の以前には、一九九〇年代にサンソンが第三共和政期のボナパルティズムのフランス革命観を検討し、従来の「悲劇」という捉え方を批判している。Rosemonde Sanson, « Les bonapartistes et le souvenir révolutionnaire (1870-1904) », in *Le XIXe siècle et la Révolution française*, Paris, Créaphis, 1992, pp.149-165.
- (13) Archives de la Préfecture de Police (APPP) 本稿で主に使用する当該時期のウィクトル派に関わる史料は以下の通り。BA62, Comité Bonapartiste, 1874-1886; BA69, Prince Victor Napoléon, 1879-1884, 1885-1887; BA419, Famille Impériale et Affaires Bonapartistes, 1879-1882; BA865, Jules Amigues, 1878-1884; BA999, Paul de Cassagnac, 1879-

1882: BA1000, Paul de Cassagnac, 1883-1885: BA1038, Henri Dichard, 1881-1884 : BA1616, Comité Impérialiste Victorien de l'Appel au Peuple du 5ème arrondissement: BA1655, Comité Impérialiste Démocratique Victorien du 15ème arrondissement.

なお、報告書という史料の性質上、それを書いた人物の見解が強く反映されているものも散見されるため、いくつか、何があつたかという内容のものを主に用いる。また国立文書館 Archives Nationales (以下AN) に所蔵のナポレオン公とヴィクトル公の書簡も部分的に使用する。400 AP 106-167, Papiers du prince Napoléon Jérôme; 400 AP 170-214, Papiers du prince Victor et de la princesse Clémentine.

(4) P. de Cassagnac, « Post scriptum : Épilogue à une controverse avec E. de Girardin », 7 décembre 1872. *Œuvres*, t.1, pp.110-111.

(5) J. Amigues, « Le peuple et l'empire », *Le Droit du peuple*, 29 octobre 1876.

(9) P. de Cassagnac, *Le Pays*, 21 juin 1879.

(17) P. de Cassagnac, « Testament authentique du Prince Impérial », *Le Pays*, 2 juillet 1879.

(21) J. Amigues, « Bonaparte et bonapartiste », *Le Droit du*

peuple, 8 octobre 1880.

(19) Michel Paganus, *Nous voulons un chef*, Paris, 1879, p.6. アンソーンはこの小冊子を偽名で刊行している。APP, BA 865, 13 novembre 1879.

(20) 拙稿「ポール・ド・カサニヤックとフランス第三共和政初期における「保守的」ボナパルティズム」『世界史研究論叢』第六号、二〇一六年、一八〜三五頁。

(21) 拙稿「ジュール・アミーグに見るフランス第三共和政初期のボナパルティズムの一面」『西洋史論叢』第六六号、二〇一六年、三二〜四五頁。なお帝政を共和政の政体としたジュール・アミーグであるが、現状の共和政は人民投票によって承認される限り、正統な体制ではなっていない。

(22) J. Amigues, « La mort de Napoléon III », *Le Droit du peuple*, 11 janvier 1880

(23) J. Amigues, « Bonaparte et bonapartistes », *Le Petit caporal*, 8 octobre 1880. Id., « Empire et République », *Le Petit caporal*, 18 octobre 1880.

(24) J. Amigues, « À messieurs les électeurs de la 2e circonscription de Cambrai », *Le Droit du peuple*, 7 décembre 1879.

(25) J. Amigues, « Lettres au peuple. Un mort », *Le Droit du peuple*, 18 avril 1880.

- (26) 前掲拙稿「ポール・ド・カサニヤックとフランス第三共和政初期における「保守的」ボナパルトライズム」: Karen M. Offen, *Paul de Cassagnac and the authoritarian tradition in nineteenth-century France*, New York, Garland Publishing, 1991.
- (27) P. de Cassagnac, « Explication (1er juillet 1873) », *Œuvres*, t.1, 28 juin 1873, pp.133-134.
- (28) P. de Cassagnac, « Qu'est-ce que le bonapartisme ? », *Œuvres*, t.1, 20 juillet 1875, pp.187-188.
- (29) P. de Cassagnac, *Le Pays*, 28 novembre 1879, ボナパルト派からのボナパルト批判に「L'Ordre, 27 novembre et 9 décembre 1879.
- (30) J. Amigues, « Lettres au peuple. La Misère », *Le Droit du peuple*, 21 décembre 1879.
- (31) J. Amigues, « Question sociale », *Le Petit caporal*, 28 septembre 1880.
- (32) フェリーによる反修道院政策に関しては以下を参照。谷川稔『十字架と三色旗—もうひとつの近代フランス—』山川出版社、一九九七年、一八六—二一九頁。
- (33) Cité par *Le Petit caporal*, 7 avril 1880.
- (34) カサニヤックのキリスト教観に関してはオッフエンの研究が詳しい。K. M. Offen, *op. cit.*, pp.97-133.
- (35) P. de Cassagnac, *Œuvres*, t.6, 20 juillet 1875, pp.40-56.
- (36) J. Amigues, « Liberté! Égalité! Fraternité! », *Le Petit caporal*, 18 avril 1880. Id., « Le peuple et dieu », *Le Petit caporal*, 1er novembre 1880. Id., « La séparation de l'église et l'état », *Le Petit caporal*, 10 novembre 1880.
- (37) J. Amigues, « Légitimistes & imperialistes », *Le Petit caporal*, 11 juin 1880. Id., « Le mouvement légitimistes », *Le Petit caporal*, 2 novembre 1880.
- (38) J. Rothney, *op. cit.*, pp.274-275.
- (39) APP, BA865, 15 et 19 janvier: APP, BA999, 18 et 21 janvier: APP, BA68, 14 et 18 janvier 1880.
- (40) J. Amigues, « La manifestation du 18 janvier », *Le Petit caporal*, 20 janvier 1880.
- (41) P. de Cassagnac, « Ce que veut le parti », *Le Pays*, 20 janvier 1880.
- (42) APP, BA865, 10 juin 1880: APP, BA999, 7 juin 1880. 一八八〇年六月の皇太子の命日や八月のナポレオン一世の誕生日のミサでは「カサニヤック万歳! アミーグ万歳」という叫びが起ったと云ふ。Le *Pays*, 15 août 1880: APP, BA865, 15 août 1880.
- (43) *Le Droit du peuple*, 13 juin et 18 juillet 1880.
- (44) *Le Constitutionnel*, 18 octobre 1880.

- (45) Cité par *Le Petit caporal*, 20 octobre 1880.
- (46) 最初期に運動の中心となつたと考えられるロマンチストの私的集會が開かれた通りの名前が取られてゐる。APP. BA865, 7 septembre 1880. その他、ロマンチスト家やカサニヤンク家等の私的集會が開かれてゐる。
- (47) APP. BA999, 19 et 25 novembre, et 3 décembre 1880. APP. BA865, 3 décembre 1880 et 23 mars 1881.
- (48) APP. BA865, 23 et 30 avril, et 2 mai 1881. *Le Petit caporal*, 5 mai 1881.
- (49) 特にナポレオンの側近が軒並み落選し、シエローム派は大なる打撃を被つた。B. Ménager, *op. cit.*, pp.320-321. 一八八一年國民議會総選挙に向けたナポレオン派の運動について以下の参照。APP. BA594, Elections Générales à la Deputation en 1881.
- (50) APP. BA1038, 13 septembre 1881. APP. BA865, 3 décembre 1881. APP. BA999, 3 décembre 1881.
- (51) APP. BA865, 2 février 1882.
- (52) APP. BA865, 19, 20 et 22 janvier 1882.
- (53) H. Dey, « À nos lecteurs », *Le Petit caporal*, 16 mars 1882.
- (54) APP. BA865, 19 mars, 5 et 8 avril 1882.
- (55) APP. BA1038, 30 janvier, 24 février et 29 mars 1883.
- (56) *Le Petit caporal*, 8 avril 1882. APP. BA69, 12 avril 1882.
- (57) Cité par *Le Petit caporal*, 18 avril 1882.
- (58) APP. BA999, 11 mai 1882.
- (59) APP. BA865, 24, 27, 28 et 30 juillet, 4 et 12 août 1882. APP. BA999, 23, 24, 27, 28 et 30 juillet, 12 août 1882. APP. BA1038, 22, 24 et 27 juillet, 2 et 6 août 1882.
- (60) APP. BA62, 29 août 1882.
- (61) H. Dichard, « Le 15 Août 1882 », *Le Petit caporal*, 16 août 1882.
- (62) H. Dichard, « L'Empire est fait », *Le Petit caporal*, 17 août 1882.
- (63) APP. BA865, 22 août, 7 septembre, 9 novembre et 25 décembre 1882.
- (64) APP. BA62, 30 octobre et 10 novembre 1882.
- (65) APP. BA1038, 22 et 31 octobre, 22, 23 et 26 novembre, et 14 décembre 1882. APP. BA1616, 27 octobre et 1er novembre 1882. APP. BA1655, 28 octobre 1882.
- (66) APP. BA865, 25 décembre 1882. 同年一八八三年三月にフランスにおけるサイクトル派のロマンチの五〇条からなる規約が詳しく報告されてゐる。その中には、入会条件の他に、皇太子の遺言の実現(サイクトル公の継承)を第一の目的とするべき、サイクトル公の成人と中央委員会 comité

centralの設立を以て、カサニヤックとアンニングを指導者として
認めらるゝことを記されて居る。APP, BA1616, 23 mars
1883.

(75) APP, BA865, 2 mai 1883.

(78) APP, BA69, 8 octobre 1882.

(79) APP, BA999, 9 novembre 1882.

(70) *Le Figaro*, 16 janvier 1883.

(71) Le Prince Napoléon-Jérôme, « À mes concitoyens », cité
par *Le Figaro*, 16 janvier 1883.

(72) B. Menager, *op. cit.*, pp.321-325; M. Battesti, *op. cit.*,
pp.532-534.

(73) Cité par *Le Figaro*, 18 janvier 1883.

(74) APP, BA62, 17 janvier 1883. ヴァクトル派のコミテは、
アンセル・オ・プールのコミテであり続けるべきであり、
ナポレオン公の逮捕に抗議するべきである、とアンニングは
委員会の訪問に対して述べた。一方、カサニヤックは不在
であった。

(75) APP, BA62, 20 janvier 1883.

(76) « Déclaration des comités impérialistes de l'appel au
peuple », cité par *Le Pays*, 20 janvier 1883.

(77) APP, BA1038, 29 janvier, 5 et 18 février 1883. また一五
区のコミテでは宣言文によつてナポレオン公を支持する動

一八八〇年代前半のフランスにおけるボナパルト派の思想と運動

きが確認されて居る。APP, BA1655, 16 mai 1883.

(78) APP, BA1038, 8 avril 1883. またダンヨリーに於ける時
期にコミテ・サントラルが作られるが、ナポレオン公が妨
害したために、効果的に機能するものにならなかつた。B.
Joly, *op. cit.*, pp.220-221.

(79) APP, BA1000, 3 mai 1883.

(80) APP, BA1038, 4 mai 1883; APP, BA1000, 30 mai 1883.

(81) APP, BA1000, 15 juin 1883.

(82) APP, BA1000, 25 et 31 juillet 1883.

(83) APP, BA1000, 30 octobre 1883.

(84) *Le Pays*, 3 et 5 décembre 1883; *Le Petit Caporal*, 6
décembre 1883.

(85) APP, BA1000, 23, 29 et 30 décembre 1883; APP, BA69,
23, 29 et 30 décembre 1883.

(86) *Le Figaro*, 18 et 29 décembre 1883.

(87) *Le Figaro*, 18 janvier 1884.

(88) *Le Pays*, 19 janvier 1884. この時期、ヴァクトル派の活動
が低調になる。APP, BA1000, 15 et 25 février 1884.

(89) P. de Cassagnac, « N'importe qui », *Le Matin*, 4 mars
1884.

(90) 前掲拙稿「ポール・ド・カサニヤックとフランス第三
共和政初期における「保守的」ボナパルティズム」。

- (61) L. de Witt, *op. cit.*, pp.143-156.
- (62) Georges Lachaud, *Le Figaro*, 25 mai 1884.
- (63) 例えば、カサニャックは「ヴィクトル公の父からの独立は全くもって政治的な意味を持つだろう」と述べている。
Cité par *Le Matin*, 31 mai 1884.
- (94) ナポレオン公はヴィクトル公が八三年一二月の論争の時点で父に背くことはないと約束したにも拘らず、承諾なしに独立したことは裏切りであると息子の行為を厳しく非難する手紙をヴィクトル公に送っている。AN, 400 AP173, lettre du prince Napoléon au prince Victor, 24 juin 1884.
なお、八四年に親元から独立したヴィクトル公であるが、本格的に党派の運営に積極的に乗り出すのは八六年以降のことである。L. de Witt, *op. cit.*, pp.172-186.
- (95) APP, BA1038, 4, 8, 11 et 22 mai 1884.
- (96) P. de Cassagnac, « À nos amis de Paris », *Le Petit caporal*, 13 avril 1884.
- (97) P. de Cassagnac, « L'accord », *Le Matin*, 13 mai 1884.
- (98) APP, BA1000, 22 juin 1884.
- (99) APP, BA1038, 21 juin 1884.
- (100) デイシヤールは反カサニャックのキャンペーンを展開するのを口実にシエローム派と交渉を行っていると。APP, BA1038, 3, 4, 8, 10, 13 et 25 juillet 1884. また、強硬なウエ
- クトル支持の態度を和らげ、アニング路線の再建を図ったが、いずれも実を結ばぬのにはなかつた。APP, BA1038, 16 août, 16 et 23 septembre, et 23 novembre 1884. また、八五年七月には、元シエローム派の日刊紙『プーブル』*Le Peuple*の主幹に就任したが、二ヶ月足らずで廃刊に追いつかれつつある。Le *Peuple*, 26 juillet et 17 septembre 1885.
- (101) H. Dichard, *Lettre au prince Victor Napoléon. Le victorisme et le parti bonapartiste*, Paris, 1885, p.4.
- (102) H. Dichard, *La fin d'un prince. Deuxième lettre au prince Victor Napoléon*, Paris, 1886, p.9.
- (103) J-M. Mayeur, *op. cit.*, pp.162-165.
- (104) 例えば、カサニャックは保守派同盟による穏健共和派との妥協を支持している。P. de Cassagnac, « Notre déclaration », 21 mai 1887, *Génèves*, t.1, pp.417-420.
- (105) Philippe Levillain, *Boulangère. Fossoyeur de la monarchie*, Paris, Flammarion, pp.27-56. P. de Cassagnac, « La République et les catholiques », 21 mars 1889, *Génèves*, t.1, pp.441-442.
- (106) APP, BA1152, Paul Lengle.